**“聖人と同時に罪人” 2017 09 03**

**マタイ 16:21-28 牧師：安達均**

主イエスからの恵みと平安が豊かに注がれますように！

2月のJapan Festivalを行ったときの英語説教で、映画、「沈黙」の話を少しした。その際、とくにロドリゴ神父の話をした。16世紀の半ばに日本でも伝道がはじまりどんどん布教され広まった。

17世紀はじめまでに、政治のリーダたちはキリスト教の広がりを恐れ、一切キリスト教を禁教とした。　禁教は約250年続くことになる。ヨーロッパからきていた神父たちや、日本のキリスト教徒たちは、踏み絵を踏まされ、もし踏み絵を踏まずに棄教しない者は、殉教していった。

そのような環境の中で、神父ですら踏み絵を踏み棄教し、余生を、もう神父ではない日本人として生活する元神父ロドリゴがいた。私には、そのようなロドリゴ神父にも、究極的には神なるイエスが働いていたことに焦点があったような映画であったと感じた。

しかし、映画でとりあげられていた、日本人クリスチャン吉次郎という人物がいて、今日の説教では、その人物の紹介をしたい。　彼は、キリスト教信者としては、なんども躓き、何度も踏み絵を踏むことになってしまう。

吉次郎は棄教せずに殉教していった神父や日本人キリスト教徒でもなければ、また棄教して完全にキリスト教徒ではない生活をはじめた者でもなかった。　彼は踏み絵をふむたびに、結局は神父あるいは元神父を尋ね、神に赦しを請うということをくりかえしたような人間だった。

わたしは、なぜか今日の聖書箇所を読み、ペトロのことを考えていると、沈黙の映画に出てきた、吉次郎のことを思い出して、その二人が重なってきた。もちろん、二人の生きた時代は異なり、場所も異なる。ペトロは一世紀にイスラエルにいた人間。吉次郎は16世紀から17世紀にかけて日本にいた。ペトロが、吉次郎がしたように踏み絵を踏んで棄教をしたかというと、そういうことでもない。

ただし、今日の福音書箇所ではないが、イエスが十字架に架けられてしまうということがわかった時のことだった。ペトロは「イエスを知らない」と、それも三度もはっきり宣言した。まさに棄教とも言えるのではないだろうか

また数週間前の福音書箇所にあったがペトロはイエスの前でボートから飛び出してイエスの前を歩き始めた。第一歩は見事に踏み出せたが、すぐに沈みはじめてしまう。イエスからは信仰の疑いを指摘されてしまう。

また今日の福音書の直前に書かれていたことは、イエスのことを「あなたは油注がれた救い主、生ける神の子です。」と100点満点ともいえる信仰告白をしたのである。しかし、イエスについての認識には、大きな誤解・勘違いがあったといわざるを得ない。

それが証拠に、今日は同じイエスから「サタンよ、ひきさがれ。」といわれてしまう。それは、ペトロの想像していた自分よがりのイエスという神の姿があった。人間が理想とする完璧な神であり、おそらく当時のローマ帝国の力をも粉砕してしまうような神を想像しており、とても十字架に架かって殺されてしまうようなイエスを想像はできなかった。

ところが実際は、必ずや十字架に架かって死にて葬られ、三日によみがえるという、神の計画の中におかれたイエスの存在があった。イエスは肉を受けた神の子であり、人として生まれ、殺されてしまい、地獄までも行き、そして父なる神により復活されるのである。

イエスは人であり神である。人間の理解においては、イエスの存在は、昔も今も、矛盾に満ちており、ペトロはイエスの復活が起こるまでは、まったく理解できるものではなかった。

いったいペトロはどういう弟子だったか簡単にまとめてみたい。信仰に疑いがあったし、イエスのことを勘違いしていたし、そして主イエスを３度も「知らない」といって否定したのである。そのようなペトロを思うときに、さきほど説明した沈黙に出てきた吉次郎のことを思い出さないわけにはいかなくなった。

そしてペトロと吉次郎の不安定ともいうべき信仰を考えるとき、そのような信仰は、今を生きるわたしたちにも、心のそこにかかえている信仰の現実ではないかと思えてくる。たとえ日曜日に罪が赦されたことを確信し、祝福され、礼拝堂から世に送り出されても、また日曜日までには重荷をかかえてくる。イエスが言われていたように、十字架を背負ってくる。　それは、イエスが十字架を背負って町中を歩かされて人々から辱めを受けたように、なにかの勘違いだとか失敗とかにより、恥ずかしい気持ちをいだき、心の重荷をかかえてくるとでもいったらよいか。

だから礼拝の最初で会衆一同とともに、罪の告白をすることに、大きな神の祝福がある。この復活ルーテル教会の礼拝においては、8時半の伝統的な礼拝においても、10時の賛美礼拝においても、また日本語礼拝においても、必ず罪の告白がある。マルティンルターは、キリスト教徒とは、聖人であると同時に罪人だという言葉を残していた。

私たちは洗礼を受けて、信仰の告白をして、神の憐れみにより正しき者（聖なる者ともいって良い）とされても、罪をおかし罪人となってしまう。かならずしも警察に捕まるような犯罪人という意味ではなく、神の御心にはそぐわない、神にそむいてしまうようなことをしてしまう。

そのような矛盾に満ちた私たちに対して、神は御恵み深く接してくださる。生ける神であり、同時に人であるイエスは、聖人であり罪人であるわたしたちとともに歩んでくださっている。それゆえ、たとえ躓きや誤解を繰り返してしまう私たちでも、救い主がいてくださるという喜びをいだいて、人生を歩むことができる。人類のすべての過ちにもかかわらず、イエスは人類を赦し愛してくださっている。